

らは白い湯気があがっている。においからして、炊きたてのお粥らしい。小皿にのっているのは梅干しのようなのだ。

「お客さん、茂兵衛さんが話があるそうだで、食べながら聞いておくんなんし」

末吉の知らない名前を告げると、女中さんは廊下へ出てふすまを閉めた。あとの暗がりには、老人がひとり、ひっそりと座っている。面構えまでは分からないが、股引をはいて半纏をひっかけ、頭に鉢巻きをしめている。宿場の馬子らしい。

老人の低いしゃがれ声が問いかけてきた。

「体のぐあいは、いかがでござすか」

この辺りでは、目上の者やお客に対して、ていねいに「ござす」とつけるようだ。末吉が育った村とそれほど遠くはないのに、使う言葉が少し違う。

それにしてもこのじいさん、孫ほど年が離れている末吉に対して、いやにていねいな物言いをする。

「旅人さんのことは、問屋場にも代官所にもお届けしてねえでござす」

それはありがたい。役人にあれこれ詮議されるのは、かなわない。

「わしは茂兵衛と申すもんでやすが、食べながら、話を聞いておくんなんし」

きのう吐いてしまっ腹の中が空っぽだったので、どん

ぶり鉢を持ってひとさじすくい口にいった。嚙むほどのこともなく、するりと喉を通る。ほどよい塩かげんが舌に残り、お粥の温かさが体中にしみわたる。梅干しを少しかじると、猛烈な酸っぱさが口にひろがった。あわててお粥をすする。

「旅人さん、どんなわけがあったか知りやせんが、若い身空で、たったひとつしかねえ命を粗末にするもんじゃござんせん」

説教をしに来たのか。だったら、願い下げだ。末吉は黙ったまま、お粥をすくって口に運んだ。

「それにしても旅人さんは、強い運をお持ちでござすな。千曲川は、中仙道でも無類の荒川といわれ、落ちればめったに助かるもんじゃござんせん。ところが旅人さんは、一夜あけた今、こうしてのほほん粥なんぞすすっておいででござしょ」

べつに「のほほん」としているわけではない。ただ、お粥と梅干しを美味しいと思う自分にとまどっているだけだ。「ところで旅人さん、つかぬことをおうかがい致しやすが、親御さんやご兄弟は、どちらにいなさるんでござしょ？」

連絡をとって迎えに来させるつもりらしいが、あいにく身寄りはいひとりもない。いないことが、きのうこの宿場へ来て分かった。

ふた親とは幼いころに死に別れ、預けられた親戚では邪